

十和田市事務事業評価シート

【事務事業の概要】

整理番号	11	実施計画番号	1
事務事業名	環境保全団体への支援		事業開始年度 昭和58年度
担当課名	まちづくり支援課		事務の種類(選択) 自治事務
根拠法令等	関連事務事業		
背景や経緯等	自然環境の保全活動を実施する市名水保全対策協議会、奥入瀬川クリーン対策協議会、十和田湖水質改善推進協議会に対し支援を行う。		
事務事業の目的	十和田湖や奥入瀬溪流など、恵まれた自然環境を次世代に引き継ぐために、自然保護に対する意識の高揚を図り、自然環境の保全に努める。		
実施状況	① 奥入瀬川クリーン対策協議会によるクリーン作戦参加者 ② 十和田湖の水質検査 ③ 名水5カ所の水質検査		

【人件費の推移】

		23年度実績	24年度実績	25年度計画
正職員	従事者数(人)	1	1	1
	活動日数(日)	10	10	10
	人件費(千円)	360	360	360
正職員以外(選択↓)	従事者数(人)			
	活動日数(日)			
	人件費(千円)			

【事業費の推移】

		23年度実績	24年度実績	25年度計画
事業費合計(千円)		480	480	730
うち一般財源		480	480	730
うち国県支出金				
うち地方債				
うちその他				

【指標】

活動指標	活動指標名①		奥入瀬川クリーン作戦参加者			
	計算式等		単位	23年度実績	24年度実績	25年度計画
			人	615	608	1,000
	活動指標名②		水質検査回数			
	計算式等		単位	23年度実績	24年度実績	25年度計画
				十和田湖1、名水5	十和田湖1、名水5	十和田湖1、名水5
成果指標	成果指標名①		奥入瀬川クリーン作戦参加者			
	計算式等	単位	23年度	24年度	25年度	
		人	目標値	1,000	1,000	1,000
			実績値	615	608	
			達成度(%)	62%	61%	
	成果指標名②		水質検査回数			
	計算式等	単位	23年度	24年度	25年度	
			目標値	6	6	6
			実績値	6	6	
		達成度(%)	100%	100%		

十和田市事務事業評価シート

整理No	11
計画No	1

【担当課による検証】

ポイント		検証(選択)	評価	点数	合計	検証の理由	
妥当性	① 市民ニーズ等から見る妥当性 市民ニーズや時代潮流の変化により、事務事業の役割が薄れていないか	A 薄れていない B 幾分薄れている C 薄れている	A	2	4	存在意義の見直しの余地 0 / 4 自然環境の保全を目的とした団体への支援であり、妥当性がある。	
	② 実施主体である妥当性 行政が実施することが妥当か(民間と競合していないか)	A 妥当である B あまり妥当ではない C 妥当ではない	A	2			
有効性	③ 活動指標から見る有効性 活動指標の実績は、順調に推移しているか	A 順調である B あまり順調ではない C 順調ではない	A	2	4	成果向上の余地 2 / 6 奥入瀬川クリーン作戦でのごみ回収や名水、十和田湖の水質保全活動による啓発は、一定の成果をあげている。ただし、一連の活動の効果を高めるために、その手法については、常に分析しながら検討していく必要がある。	
	④ 成果指標から見る有効性 成果指標の目標達成状況は、順調に推移しているか	A 順調である B あまり順調ではない C 順調ではない	B	1			
	⑤ 事務事業の見直しの余地 成果を向上・安定させるため、事務事業の見直しの余地はあるか	A 見直しの余地はない B 検討の余地あり C 見直すべき	B	1			
効率性	⑥ 事業費の削減の余地 事務手順の見直しや正職員以外での対応により、成果を下げずにコスト削減は可能か	A コストに無駄がない B 検討の余地あり C 可能である ★ 実施済	A	2	6	コスト削減の余地 0 / 6 各団体とも一定の成果をあげており、削減は考えていない。	
	⑦ 他の事務事業との統合・連携 類似又は関連事業との統合・連携により、成果を下げずにコスト削減は可能か	A コストに無駄がない B 検討の余地あり C 可能である ★ 実施済	A	2			
	⑧ 民間委託等 民間委託・指定管理者・PFI等により、成果を下げずにコスト削減は可能か	A コストに無駄がない B 検討の余地あり C 可能である ★ 実施済	A	2			
公平性	⑨ 受益の偏り 現在の受益は公平か。特定の個人・団体に受益が偏っていないか	A 偏っていない B 多少偏っている C 偏っている	A	2	4	受益者負担適正化の余地 0 / 4 いずれも公益性の高い団体である。	
	⑩ 受益者負担の見直しの余地 現在の受益者負担は適切か。見直しの余地はあるか	A 見直しの余地はない B 検討の余地あり C 見直すべき	A	2			
現在の適性					18 / 20	改善の余地	2 / 20

【点数化による検証】

当該事業の現在の適性は20点中 **18** 点です。

当該事業の改善の余地は20点中 **2** 点です。

【担当課長による評価】

当該事業の平成25年度の方向性(選択) ⇒ **有効性を改善して継続**

方向性の理由
自然環境の保全は大きな課題であり、関係団体と協議しながら、常に活動内容を分析、評価しながら、より高い効果を求めなければならない。その意味で検討の余地は十分ある。
今後の具体的な取組方策と狙う効果
関係団体への支援を継続するとともに、より効果ある手法を検討しながら、自然環境の保全活動の啓発に努める。